

第2編 地理学研究者の地理教育観

第4章 地理学研究者と地理科教科書

本章では、本研究において地理学研究者の代表として、山崎直方・小川琢治・石橋五郎・田中啓爾を取り上げる理由を述べる。

第1節 近代日本地理学史の時期区分

近代日本地理学の大筋の流れを見る上で有効と思われる方法として、地理学史の時期区分の試みがある。例えば、日本地理学史の時期区分をしたものとしては岡田の研究¹があり、日本地理学史全体を通覧するために、全体に目が行き届いており、かつ最新の成果が盛り込まれている。

岡田は、飯本・野間・湯浅・深井らの先行研究をふまえた上で、1889年から1945年までの間を、1889年～1907年「前アカデミー地理学期」、1907年～1924年「アカデミー地理学の形成期」、1924～1937年「アカデミー地理学の展開期」、1937年～1945年「戦時期」として4つに区分している。

とりわけ、京都帝国大学文科大学に地理学講座が設けられた1907年を始まりとする「アカデミー地理学の形成期」において、「官学派あるいは正統派」として山崎直方、小川琢治、石橋五郎をとりあげ、各大学において地理学教室が整い始め、本格的に地理学研究が行われた時期の代表として、この3人を取り上げている。小川は「京都大学における地理学の伝統を築いた人物」として、また山崎は「地理学界そのものを代表する人物」として取り上げられている。石橋は「最初の人文地理学者」とし、その学風は内田寛一（1888-1969）や別技篤彦（1908-1997）をはじめ、辻田右左男（1907-1997）、織田武雄（1907-）などに感化を与えたとその学問的系譜を述べている。

そして、1924～1937年までの「アカデミー地理学の展開期」においては、山崎の後継者である辻村太郎（1890-1983）、近世歴史地理学の開拓者としての内田寛一（1888-1969）らと共に地誌学派を形成した田中啓爾らが登場した。この時期は、山崎を初めとする第一世代の後をうけ、日本地理学が展開、発展した時代として位置づけられている。この後の時代は、地理学と戦争の関わりが密になる時期に移行していく。

こうしてみると、山崎、小川、石橋は近代日本地理学の草創期において重要な位置づけにあったと見なす。また、田中についても地理学のみならず教育において業績があったことは周知の事実といえよう。

第2節 山崎直方・小川琢治・石橋五郎・田中啓爾に対する評価

前節に於いて、岡田の研究をもとに近代日本地理学史の流れを瞥見した。そこでは、山崎・小川・石橋について高い評価が与えられていた。また、田中に対しても地理学と地理教育の両分野において重要な人物であったことは言うまでもない。

この岡田の研究以外にも、竹内は、第一世代のアカデミー地理学者として、小川琢治、山崎直方、田中啓爾、石橋五郎、辻村太郎、内田寛一をあげ、「ファースト・ハンドの外国文献に接することを非常に重視し、西欧の近代地理学の移植という形で、日本における近代地理学を樹立した」²と述べ、その権威性に言及している。

飯本は、日本の地理学に言及する時、自然に思い出される人として、まず山崎直方を挙げている。その理由を「当時本邦斯学研究上の高い地位に在つて、廣く天下の学徒を指導された点、及び博士の直接の教へ子が今日日本の地理学界の略々最上階に活躍してゐる事である」³としている。また、我が国西日本の地理学界を代表する学者として小川琢治をあげ、この2人が活躍する前、具体的には明治40年前後までを「混沌時代」とし、「地理学が未だ科学としての外貌をなすに至らず、主として旅行記、案内記等の如き低級な地誌か、然らずんば、外国直訳体の所謂『地文学』の流行を極めた時代」⁴としている。

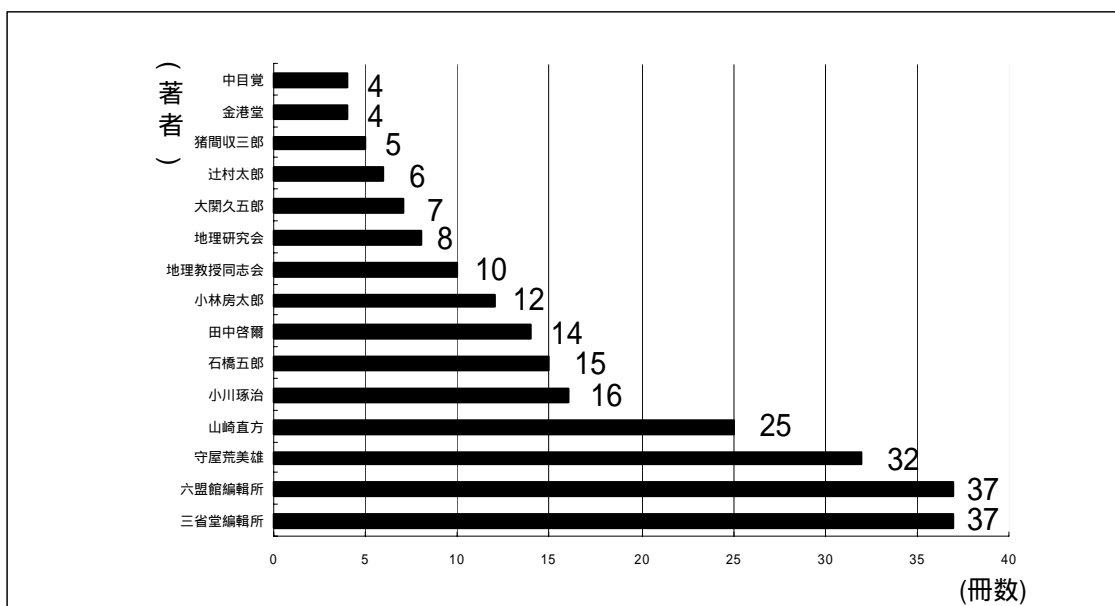
さらに、飯本は、1919年に東京帝国大学に地理学科ができた頃から地理学が「次第に自然地理万能から漸次人文地理学への進展飛躍が見られ始め」と変化したと述べ、その後地理学が中等・初等教育界へ著しく進出したと述べている。飯本は地理学と地理教育の「橋渡しをした功労者」⁵として田中啓爾を位置づけている。

このように日本の近代地理学史上重要な位置づけがなされている4人が、学校教育の地理科に影響を与えた可能性は十分に考えられる。特に山崎や田中は文検委員⁶であったことから、検定試験の問題作成を通して、地理科を教育現場において教授する際に求められる知識、能力の基準をつくることとなった。

また、山崎は、東京高等師範学校教授と東京帝国大学教授を兼務しており、教育と学問の両方において重要な立場にあった。山崎や小川琢治の師である小藤文次郎にはみられないほど、その教科書は広く普及した。彼が著した教科書は何度も版を重ね、彼の死後も辻村太郎によって引き継がれ(第5章;第5-1図)、その影響力をもっていた。

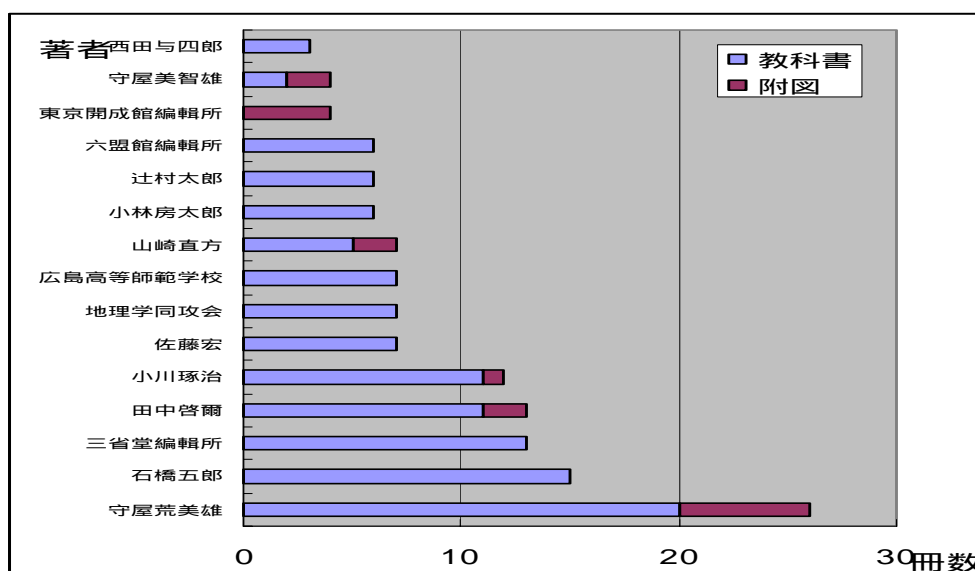
第3節 地理科教科書と4人の地理学研究者

山崎が東京帝大教授に就任したのが1912年、小川が京都帝大教授に就任したのが1908年、石橋が京都帝大教授に就任したのが1910年、田中が東京高等師範教授に就任したのが1923年である。この4者の活動時期が重なる1910年代から1930年代に発刊された地理科教科書・地理附図の数をグラフ化したものが第4-1図である。



第4-1図 著者別による1910～30年代にかけて出版された地理教科書・附図の発刊数(初版のみ)〔国立教育政策研究所の資料より，筆者実見により作成〕

1910～30年の中学校地理科教科書の代表的な執筆者としては，三省堂編輯所，守屋荒美雄(1872-1938)⁷，六盟館編輯所といった在野の地理学研究者，すなわちアカデミー地理学者とは異なった人たちが首位をしめているが，それに山崎直方，石橋五郎(1876-1946)，小川琢治といったアカデミー地理学者たちが続いている。



第4-2図 著者別による1920～40年代にかけて出版された地理教科書・附図の発刊数(初版のみ)〔国立教育政策研究所教育図書館資料を参考にし，著者実見により作成〕

アカデミー地理学者達以外で多くの教科書をあらわしている守屋荒美雄については、多くの地理科教科書を著してきたことは知られているが、その理由については別稿にて筆者が地理附図に限定して明らかにした⁸。その内容を簡潔に述べると、1872年から1945年までの地理附図の質的変遷の特徴は、学問的要求や時代からの要請のため詳細に地名をのせていく立場から、著者の教育的意図を明確にしてさまざまな資料図を掲載し、教材というものにふさわしい地理附図が発行されていったといえる。換言するならば、単なる「地図」から「地理学的地理教材」⁹へ、そして「教育的地理教材」への展開であったといえる。具体的には守屋の地理附図には教育効果の重視が顕著に見受けられ、地理附図教材研究のひとつの頂点と見ることができたということであった。地理附図に限定しての結論であるが、教科書についても教育的地理教材の傾向を強くみることができる。しかし、本研究の趣旨はあくまでもアカデミー地理学者と地理教育との関係を照射するためであるため、その守屋の詳細な地理教育史における検討については別稿にて行いたい。

以上の4人の地理学研究者を取り上げることで、1900年頃から1945年にかけての旧制中学校における地理教育の構造と変遷をたどることができると思われる。

【注】

- 1 岡田俊裕『地理学史 人物と論争』古今書院，2002，24-34頁。
- 2 竹内啓一「近代日本地理学史の一断面をみる」竹内啓一・正井泰夫編『地理学を学ぶ』古今書院，1986，348-349頁。
- 3 飯本信之『地理学発達史』中興館，1940，247頁。
- 4 前掲3) 248頁。
- 5 前掲3) 251-252頁。
- 6 「文検」とは、1885(明治18)年から1943(昭和18)年まで行われていた制度で、独学で師範学校、中学校、高等女学校の教員免許状を取得しようとする者に対して、文部省が行った資格検定試験のことである。
- 7 守屋荒美雄は、1872年岡山県に生まれ、1896年に文検(文部省教員検定試験)に合格した。各地で教職をへて、1911年、獨逸学協会学校勤務を経て、教科書執筆に専念する。1916年には帝国書院を創設し、多くの地理科教科書・地図帳を発行する。晩年には、帝国第一高等女学校(現吉祥女子中学・高等学校)を創設し、1925年創立の財団法人関東商業学校(現関東第一高等学校)の経営にも参画した(1938年没)。
- 8 近藤裕幸「戦前の中学校地図帳をとらえてみた地理教育論の展開」『早稲田大学教育学研究科紀要(別冊)10-1』2002，203-215頁。
- 9 「地理学的地理教育」については、白井哲之「地理教育の歩みと日本地理教育学会」『新地理』47-3・4 35-44頁において定義されている。